

招待席

齋藤 緑雨

さいとう りょくう 批評家・小説家 1867.12.31(新
1.25日) - 1904.4.13 三重県鈴鹿神戸新町に生まれる。
すぐれた文章家の素質から批評にも創作にも手を染め、鷗
外や紅葉露伴と並び称された優れて特異な明治初期文壇の
一方の雄。掲載作はごく短編ながら稀有の一母親を渡し
舟の風情ににじませ書ききっている。明治三十三年(1900)
二月「太平洋」第六号に初出。添えた小唄にこの作者の心
の闇の深さが察しられる。

わたし舟

黄昏(たそがれ)の帰り路(ぢ)を少しも早くと渡し場に到れば、われより先に
五十許(ばかり)なる女の、唯ひとり踞(つくば)ひたるが軽く手を縁(へり)に置
きて、顔馴染なるべしやをら棹(さを)取上げんとする船頭相手に、何事か一心
に語り居たり。

それぢやあ何だな、まだ一件は片附かねえのだな、ほかでもねえ親子の中だ、
てへげへにして置きなせえな。

そりやあ船頭さん、お前さんには利(き)ける口だが、儂(わたし)には利けな
い口だよ、此?(このあご)が干(ひ)るか干ないか、早い処が生死(しやうし)の
分目(わかれめ)、大概にしたらあすの日は立たない、やつと十六から取附いて、
ことしが二十一、散らしは品(ひん)に障るといふので、此(この)八年に旦那だ
つて四人か五人、掛けた元も碌々(ろくろく)還らず、いざこれからの間際(ま
ぎは)になつて、阿母(おつか)さんおさらばは余(あん)まりぢやないか、姉は
姉で、静岡三界を勝手にほつき歩いて、今ぢや壮士(さうし)役者のおかみさん
気取、籍は這入(はい)りませんが躰(からだ)はちやんと這入つて居ます、どう
ぞね阿母(おつか)さんとばかりで手も附(つけ)られない、せめて妹(いもと)の
奴でもと思へば今度の始末、親の威光も如斯(かう)なつちやあお仕舞さね、丁
度二月越(ふたつきごし)を摺(す)つた揉んだで、渡場(わたしば)の御奉公だけ
でも随分だよ、お前さんの前だが米は安くなれ鼻は高くなれ、よかれよかれで

彼奴(あいつ)を今日迄育上(そだてあ)げた苦勞と言つたら、ほんとに通りぢやなかつた、一旦は稽古所へも遣(や)つて見たが、姉ほど喉(のど)が面白くないので、シヤにはできない、モノにしたらと急に手筈をかへて、うぶで御座います、世間見ずで御座いますと、今以てそれが通るから可笑(をか)しいね。

シヤだのモノだのつて、おらが方ぢや聞かねえ符牒(ふてう)だ、何の事だな。

船頭さんでもない、シヤと言やあ藝者、モノと言やあ囲ひもの、字で行くか假名(かな)で行くか、女の捷徑(ちかみち)は此(この)二つさ。

それぢやあ売られるに極つて居るのだ、売(うり)たいばかりに育てたやうなものだ。

当り前だらうぢやないか、此節(このせつ)女を売らないで何(だ)うするものかね。濫皮の剥(む)けたとか剥けぬとかは昔の論だよ、オヤあれがと言ふやうなのさへずんずん捌(はけ)るのだもの、産声(うぶごゑ)からが違つて居らあね。

爾(さう)出られちや仕方がねえ、商売なら商売で煩(わづら)ひのあるものだ、今度の事は宜(いゝ)加減に諦めなせえ。

御他人様の身につちやあ、煩(わづら)ひとも祟りとも仰有(おつしや)れだが、儂(わたし)には行先(いくさき)の杖柱(つゑはしら)といふよりか、今が今三度のおまんま、色の白いほど何方(どちら)も直(ね)がいゝといふ訳さ、何がお前さん耻(はづか)しいものか、親子が二人がかつかつの手内職(てないしよく)、お粥はお薩(さつ)を入れましたのが一等おいしう御座いますとでもいふ事なら、成程大声では言ひにくからうが、憚(はゞか)りさま、売れるものを売のに理窟はあるまい、旦那取りにだつて相応に駈引(かけひき)の要るもので、親の目にさへいけ好かない位のでなけりやあ、たんまりした事には有附(ありつ)けない、厭と思つたら絞れるが、其処(そこ)にちよいと蟠(わだかま)りが出来て見ると、流石(さすが)は人情と言ひたいやうな事もあつて、妾(めかけ)に人情は出しツ放しの盥(たらひ)より邪魔なものさ、全躰(ぜんたい)今度のゝ触込(ふれこみ)が仲買(なかゞひ)の番頭といふので、此奴(こいつ)浮沈みがあるとは最初から知つて居たが、まゝよ沈んだらそれ迄、浮いて居る中(うち)と思つたのが此方(こつち)の不覚、親馬鹿とは穿(うが)つたものだね、何日(いつ)の間にか娘の方から逆上(のぼせ)込んで、指環も時計も貰つた物は逆戻し、揚句の果(はて)が連出される迄気が付かずに居た、段々探つて見ると女泣かせとか博士とか言つて、ちよろソかな野郎とは野郎が違ふさうだ、活物(いきもの)の事だから娘だけ返してくれたら、跡は災難とでも何とでも諦めるが、生憎(あひにく)と彼奴(あいつ)がおんのろで、野郎の傍を離れないと来て居る、憎(にく)いたつて彼様(あんな)なのは有りやあしない。

だがさう一概(いちげへ)に言つたものでもねえ、末々もある事だ、娘を糶市(せりいち)に出すやうな事ばかり考へて居ちやあ、冥利(みやうり)が恐ろしい

や。

冥利が尽きたつて金さへ尽きなきあ、何一つ恐ろしい事があるものかね、世の中は御方便なもので、行儀々々で固めて居た表の先生とかは、喰ふに喰はれず首を釣つて死んださうだが、妾(めかけ)のあがり路端(みちばた)に倒死(のた)つて居たといふのは、この年になつて未聞(まだきい)た事がない、惚れたけりや遠慮なく金に惚れる、男に惚れるなど呉々も言聞かして置いたのに、とうとう此様(こん)な事になつて仕舞つた、戻すか戻さぬか今晚が手詰めといふのだが、困ひ者が旦那に惚れちやあ芝居にもならない、もうもう男に惚れる女は、親ながら懲々(こりこり)だ、揃ひも揃つて儂(わたし)の処の奴等(やつら)は、どうして彼様(あん)なに不孝なのだらう。

望める岸に船の着くとひとしく、女は小走りに走り抜けて、其処(そこ)なる小路(こうち)を左に折れしが、遠からぬ橋間(はしま)に早(はや)灯影(ほかげ)の見えそめて、薄明く薄暗きおぼろが中を、水は猶(なほ)ゆるく流れぬ。仰げば星出でたり。

明治三十三年二月

ねざめ

暁の、鐘に泣いたは昔の夢よ。果てぬ仔細に隔てられ、のけば互ひに知らぬ人、見ぬ人遂に逢はぬ人。おもふことなき筈なれど、なぜか寢覚(ねざめ)の燈火(ともしび)を、掻立(かきた)てゝ見る片明り。窓をたゝくは村雨(むらさめ)か、ぱらりぱらぱら木葉もまじる、騒ぐまいぞや小夜嵐。今ぢや夜中の鐘に泣く。

くりこと

撞(つ)いてくりやるな今宵の鐘を、きけば悲しゝ聴かねば寂し。一つ人の世荒れにけり、妹(いも)が垣根のつぼ堇(すみれ)、古郷(ふるさと)の事おもひ出す。二つ再び逢ひ難き、御墓(みはか)の下の苔の露、親々の事憶ひ出す。三にさりとは告げられぬ、今の憂き身を鐘の敷、四(よ)つ聴けば四(よ)つおもひ出す。五ついつまで飛ぶ雲の、ちぎれちぎれに腸(はらわた)を、風にまかせて?(むし)るより、撞かざ止(や)むまい鐘ならば、富も榮えも勢ひも、われや仇(あだ)なる恋も名も、闇から闇へ唯一撞(たゞひとつ)きに、死んでしまへと何故(なぜ)撞かぬ。

かね

鐘がいつ、明ける暮れるをわしや知ることか、人の撞く鐘人が泣く。昼は長かれ夜(よ)は短(みぢか)かれ、わしは撞かれて只鳴るばかり、白い黒いは空に問へ。

くさの戸

梅が咲きます土筆(つくし)が出ます。去年(こぞ)の古衣(ふるぎぬ)わしや着たまゝの、春は隣の垣の外。いつの此身に惜(をし)からぬ、花が咲こやら芽が出やうやら。障子あければ雀が三羽、日向(ひなた)あちこちちゆつちゆつちゆ、阿房(あほ)な枯木もあるぞいの。

まばたき

鐘が鳴る、鐘の絶間(たえま)を雨が降る、雨の絶間を蟲が啼く。蟲は何蟲父恋し、母も恋しの彼君(かのきみ)も、今居ぬ人の皆恋し。蟲の絶間を寐(ね)もやらず、寐もやらねども夢を見る。夢の絶間を燈火(ともしび)の、まばたき暗き床の中、秋の夜長をわしや一人、あゝわしや旅に唯一人、枕仕替へて眼をつぶる。